

Title	Expression in Japanese Culture : an Inquiry into the Phenomenon of Image-Laden Loci Observed in Language, Music and Poetry
Author(s)	Zhivkova, Stella T.
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46583
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について〈/a〉をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ジフコバ ステラ Zhivkova T. Stella
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19952 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	EXPRESSION IN JAPANESE CULTURE : AN INQUIRY INTO THE PHENOMENON OF IMAGE-LADEN LOCI OBSERVED IN LANGUAGE, MUSIC AND POETRY
論文審査委員	(主査) 教授 根岸 一美 (副査) 教授 大橋 良介 助教授 伊東 信宏

論文内容の要旨

本論文(日本語要旨に示された訳題は「日本文化における表現—言語・音楽・詩に見られる image-laden loci の現象に関する研究—」)は、日本の日常言語におけるオノマトペ、琴の稽古における口唱歌、俳句・和歌などの言語芸術、文楽三味線、さらには香道、三味線のサワリ等、さまざまな文化領域に観察される、イメージを担った諸形象とそれらの具体的な現れならびに意味作用について総合的に検討し、そのことを通じて、日本の文化パターンを解説・翻訳する可能性を探ろうとするものである。A4判全 119 頁。Abstract, Acknowledgment, Notes on the Text (以上 p. i-x), Introduction, Part One (Chapter 1-4), Part Two (Chapter 5-7), Summary in Japanese, Reference Glossary, Bibliography (以上 p. 1-109) から構成されている。

Introduction は *Foci of Imagistic Intensity in Japanese Culture—Their Role for Communication and Reconstruction of Meaning* との副題が示されており、本論文における研究の方法として、1. イメージを担った形象それ自体をその現象の様態に即して分析する、2. 個々の形象をより大きな実体(詩、音調やセンテンスなど)の一部として分析する、3. この現象を日本文化の全体的環境と照らし合わせて分析する、という三重の分析プロセスを提起している。そして本研究が、日本について扱った数多くの先行研究に比して、日本文化をその総体において分析する点において独自性を示すものであることを主張している。

続いて第 1 部 *Concrete Examples of Image-aptness in Japanese language and Art* に移り、第 1 章では、提出者にとって日本語のなかでもとりわけ独自の要素として映じたオノマトペ(擬声語、擬音語、擬態語)に注目し、小さな言葉が大きな物語を語るコードを担いいうることに特別の関心と観察を捧げている。

第 2 章は、琴のレッスンの際などに用いられる口唱歌に注目し、これらが辞典的意味をほとんど持たないにもかかわらず、イメージを担った形象として、きわめて多くの運動的力動的な情報を伝えるものであることを、自身の経験を踏まえつつ解き明かしている。

第 3 章は俳句と和歌における、また第 4 章は琴と文楽の三味線音楽における、イメージを担った形象について探求し、それぞれ豊富な例示と分析を行うことにより、今までの議論の強化を図っている。

Examples of Processes of Metaphor Creation と題された第 2 部では、まず第 5 章において、香道に用いられる香りの印象が、和歌や俳句とイメージ的に関連づけられる事象に注目し、第 6 章では、三味線の「サワリ」がその独自

の音色によって、川の流れる音、風のそよぐ音、虫の鳴く声などのメタファーとなっていることを指摘している。そして最後の第7章は、本論文全体のまとめであり、「日本文化の独自性」が単なるキャッチフレーズではないこと、すなわち、日本文化は実際に独自の性格を持っているのだということを改めて主張している。

論文審査の結果の要旨

本論文は2000年4月にブルガリアより初めて来日し、日本語および日本の文化現象に数々の新鮮な驚きを感じた提出者が、それらの体験の共通の根源をめぐって問い続けた考察の成果であり、5年余の日本滞在のなかで豊かな文化観察ならびに解釈をなしたことを証する研究となっている。本論文に関わる公開口頭試問は2006年1月31日に行われ、審査委員より異口同音に、日本人の気がつかないような数多くの観察に満たされた、すぐれた文化論としての評価が示されたが、同時に学術論文として望まれる点も多々指摘された。それらは、1) 注における表記が厳密に行われていないこと、2) 引用文献についての基本的な理解に不足感のあること、3) 文化理解における‘totality’に危うさが見られること、4) 他の文化圏との比較の視点が必要であること、5) 他の文化芸術領域における記述と比べ、香道論については経験の不備が露呈していること等、多岐におよび、とりわけ概念運用の厳密さ、方法論的吟味の必要性が指摘された。また、基本となる用語について、lociとfociのような言い換えが多く、用語の統一性が必要と見られること、一旦得られた一つの直感的理解をさまざまな文化領域において演繹的に例示している形をとっているため、諸例が相互に立論を支え合っている強さとともに、視点や力点を変えることによって亀裂が生じるかもしれないという危うさがあること、さらに、扱われている文化領域が概して伝統的な分野に傾いているために、現代の日本の状況が置き去りにされているのではないかと懸念があること等も示された。これらの指摘ならびに問いはすべて日本語で行われたが、提出者はいずれに対しても的確に自らの知識と判断を示すことができ、日本語の運用能力においてほとんど問題のない域に達していることを証明する機会ともなった。本論文は提出者にとっても外国語である英語で表記されたが、そのことは日本文化についての知と理解を国際的に広めるうえに効果をもたらすものと受けとめられよう。また、指摘された諸問題も、今後の研究を通じて個別に、また徐々に解決可能のものと判断されよう。以上のことより、本論文を博士(文学)の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。